

有部を巡る諸問題

三 友 健 容

問題の所在

本日はお招き頂き有り難うございました。佛教学セミナーの公開講演に呼ばれるようになって、間もなく定年退職の時期を迎えることになるようで淋しくなりますが、アビダルマを専門としてきた学問人生の締めくくりとして、日頃疑問に思っている一端を述べまして、平成一四年から二年間、大谷大学に客員研究員として迎えられ、できて間もない響流館の一室を与えられて研究できた学恩の一分に報いたいと存じます。

ところで、佛教を研究していて、昔からおかしいのではないかと思っている謎がいくつか有り、今もって解決できないでおります。是非、皆様に教えて頂きたいと思っております。さてその謎の一つに説一切有部の名称があります。部派の名称は、その部派の比丘たちが活躍した地方あるいは部族、教師の名前を冠したものや、教理上の特色を述べたものが多い。

そのなかでも、諸法は無常であり、苦であり、空であり、無我であると釈尊が説いているのに一切諸法が実有であるという「説一切有部 Sarvaśivādīn」の名称はどう考えても釈尊の教えに馴染まない。はたして彼ら自身当初から

「説一切有部 (Sarvāstivādin, Sabbathivāda, Sabbathavāda)」と呼んでいたのであろうかと素朴な疑問を抱かざるを得ない。三世と無為とが実有であると説いていたから、「説一切有部 (Sarvāstivādin, Sabbathivāda)」であるというのならば、三世と無為とブドガラが実有であると説いていた犢子部こそまさに説一切有部といわれるべきなのに、なぜ説一切有部とはいわれないのだろうか。有部はまた説因部 (Hetuvādin)、因論、一切語言部、分別説部、ムルンタカ部とも称されていたと伝承されており、本来これがかれらの名称であったのに、後に教理が整理され特色が明確になつてから説一切有部 (Sarvāstivādin, Sabbathivāda) と自他ともに呼ぶようになったのではないだろうか。

また、根本分裂は Vajjiputtaka-bhikkhu たちが提唱した十事の問題から生じたが、かれらが大衆部を形成したのならば、その主体は Vajjiputtaka であるのに、なぜ同名の Vajjiputtaka が上座部に存在するのであるかという素朴な疑問が未だに解決できず残っております。是非、皆様のご意見をお窺いしたいと願っております。

I 有部の名称

a 資料にあらわれる名称

有部の成立に最も関係が深いのは『発智論』の作者である迦多衍尼子 (Katyāyanaputra) である。静谷正雄教授はマトウラーより西北の地方で、マトウラーで強大となった大衆部の主張と行動に触発されて、説一切有部が成立した。その有部は迦多衍尼子の『発智論』によって思想的武装を固め、カシュミールやガンダーラで多くの俊秀によって確かな地盤を築いたとして、「一切は有り」と主張する部派は、常識的にいって「一切は仮名で実体がない」という主張に対してうまれたと考えざるを得ないとする。^①ところで、Sarvāstivādin の名称が見られるようになるのは、マトウラーの獅子柱頭銘文とサルナートの欄楯銘文が最初であると考えられている。

マトウラー出土の獅子柱頭銘文には Sarvastivadana, Sarvastivatrana の語がでてくる。^②マトウラーは有部のほかに

大衆部が勢力をもっていたといわれ、この碑文からサカ族の王たちが説一切有部に帰依をし、有部が大衆部に対抗する大きな勢力をもっていたことがわかる。この碑文を静谷教授はCE11世紀とみるが、塚本啓祥教授はBC11世紀からCE11世紀とみている。

また、サールナート出土の欄楯銘文には、「説一切有部の諸師の所領 (acaryanam Sarvativadinam parigrāhe)」とあり、静谷教授は欄楯の発見された位置から考えると、サールナートの中心をなすアショーカ建立の主塔は説一切有部の管理下にあったと考えられるとする^③。この碑文には日付はないが、もしアショーカ王時代（紀元前三世紀中頃）に関係があるとすれば、かなり早くから説一切有部とよばれていたことになる。

また、有部の別名として『文殊問經』（CE518僧伽婆羅訳）には一切語言部と称し、『十八部論』には因論と名付け、『異部宗輪論』・『部執異論』には説因部といわれ、Bhavya の *Nikāyavedarvibhāṅgavyākhyāna* では、いかなる僅少のものも、過去、未来、現在の一切は有部であると説くから説一切有部といい、それらのなかで、あるものは有である。すなわちすべて業は果を起こすわけではなく、あるものは無であり、すべて業を感受し、未来に及ばないなどと分別して説くから分別説部ともいい、いかなる僅少のものも、已生、現生、未生すべては因を伴うと説くから説因部といい、ムルンタ山に住しているからムルンタカ部ともいっているが、*Vibhajyavādin* (分別説部) を除いては、これらの名称は碑文には出てこず、わずかに *Buddhagosa* の *Kaṭhāvatthu* の註に説因部 (*Hetuvin*) の名が出てくるだけである。

b ムルンタカ部 (*Muruntaka*, *Urumundaka*, *Rurumundaka*)

ムルンタ (*Murunta*) 山に関しては、マトゥラー有部の伝承である *Asokavāṇana* にアショーカ王の師であるウパグプタがマトゥラーのウルムンダ山 (*Rurumunda*, *Urumunda*) のナタバチカー寺 (*Natabhūṭika*) で活躍したことを記して

る。Mathurāへ開教したのはAnandaの弟子のSanakavāsi(商那和修)である。カシユミールへ開教したMadhyantikaも同じくAnandaの弟子であったから、Sanakavāsiと同じころに活躍していたことになる。Sanakavāsiは小戒でも犯さないことを持戒とする戒律至上主義や多く聞けばよいとする形式主義に反対し、見清浄が戒を持つことの第一の戒であり、聞いたことを如実に実行することが多聞であると主張していたといわれる。⁷⁾かれはMathurāの兄弟の長者(Nata, Bhata)を教化し、ウルムンダ山(Urumunda)に修行処を建立してもらい、兄弟の名前を冠してナタバチカ精舎(Natabhatikāraṅgāyatana)とした。このGupta長者の第三子UpaguptaがSanakavāsiの法燈を継承することになる。Upaguptaへ付法し終わったSanakavāsiは涼しく病いもなく坐禪に快適なカシユミールへ移動している。Asokāvādaには、その後、Upaguptaのウルムンダ山ではなほ新しい活躍が記されており、Asoka王の師となったことも伝えているから、かれを中心とする教団がかなり大きな勢力をもっていたことが窺えるが、のちの有部教学の基本となるようなものは資料には見当たらない。Bhavyaの伝えるムルンタカ部とは、Mathurāで大衆部に対して首位に立とうとしていた上座の系統が、有部付法蔵に出づくるUpaguptaの住した山に因んでUrumunda (Rurumunda)部と呼ばび、チベット語への音訳で、MurunṭaとなりMurunṭaka (Murunṭa)に属する人々)となったことがわかる。

c 分別説部 (Vibhajyavādin)

Vibhajyavādinの名称は碑文にいくつか見られる。『大毘婆沙論』における分別論者の主張の吟味に関してはすでに赤沼智善博士と木村泰賢博士の論究がある。⁸⁾ Mahāvamsa (p. 54)によると、Theravādaがかれら自身をVibhajyavādinと呼ぶことを欲しており、またBahusrūṭiya-Vibhajyavādin或いはSavāsītvāda-Vibhajyavādinという語の用法から類推して、多分Theravādaの中に意見のちがったグループがあつて、かれら自身をTheravāda-

Vibhajyavādin と呼んで区別したのではないかという意見もある。また、龍樹の『大智度論』には声聞のひとつでアビダルマの論議に従うものは毘婆沙 (Vaidhāsa) という^⑩とあり、とくに説一切有部系統のものは毘婆沙師 (Vaidhāsika) と呼ばれていたようであるが、迦多衍尼子の『発智論』以降のことであろう。

d 説因部 (Hetuvādin)

佛音 Buddhagosa が説因部の主張であるとしているものを佐藤密雄博士の『新訂増補 論事付覚音註』によって整理してみると説因部の主張には、稚拙なものがあるという感が拭いきれないし、因を説く部派 (Hetuvādin) としての特徴をみる事ができない。南伝の部派分裂を伝える資料には、説因部の名称は出てこないで、ただ佛音の『論事註』 *Kūṭavāṭṭhupākaravāṭṭhakaṭṭhā* だけは有部とは別の部派と立てているが、ここからは有部との関連は明確にはできない。しかしながら、『大毘婆沙論』^⑪では三世実有を論ずる際に、三世が実有でないならば異熟因が現在世にあると、異熟果はどの世で受けるのかとしており、いわゆる六因四縁の教理は説一切有部の特色でもあるので、説因部乃至は因論と呼ばれていたとしても問題はない。

e 一切語言部 (Sarvaśāstrīka)

また『文殊問經』には有部の別名として一切語言部をあげている。この説明によると三世実有を執し、一切は語言に措くべきであるとしている。すなわち『三論玄義』によると、佛滅後三〇〇年の初めに迦旃延尼子が滅してから、上座部は上座弟子部と有部に分裂し、上座弟子部は経を正として弘め、アビダルマは経典を解釈する際にもこの意味を逸脱したり、不足することがあるため重視しないが、そうかといって律藏・論藏を棄捨することもなかった。一方、有部はアビダルマを最勝とし、迦葉から掘多に至るまでは上座弟子部と同じく経典を弘めたが、富婁那からは経典よ

りもアビダルマを弘め、迦旃延尼子に至ってアビダルマが興隆し、ついに分裂したというから、經典よりもその解釈を重視した部派ということになる。一切語言部のサンスクリット名は不明であるが、『檢幽集』¹³⁾は「語言とはすなわち説のことである」と述べている。しかし、これをもって Sarvastivādin の翻訳とは思えない。あるいは Sarva-vākyavādin とも考えられるが、碑文には出てこない。『文殊問經』は一説部 Ekavyavaharika を「執一語言部」と漢訳しているから、一切語言部は Sarvavyavaharika となる。ところがこれも今のところ碑文には出てこない。碑文に出てくる有部の用例は現在のところ一〇例だけが知られている。¹⁴⁾

それらの銘文のうち、最も古い Mathura 獅子柱頭銘文には Sarvastivat(ri)ana とある。vat(ri)ana という語はサンスクリット語にはないが、動詞 vac から派生した言葉とみると、まさに「説一切有部」となる。これに対して、Dhapaṃsa(CE: IV), Mahāvamsa(CE: VI)などのパーリテキストは、Sabbathavādin と記しつゝ athavādin という用例はパーリ經典などにもでてくる。¹⁵⁾ すなわち、過去・未来・現在の諸法に關して如来は時を説くもの (kālavādin)・真実を説くもの (bhūta-vādin)・正義を説くもの (attha-vādin)・法を説くもの (dhamma-vādin)・律を説くもの (vinaya-vādin) であるから如来 (tathagata) と同いのであるとする。¹⁶⁾ この経文は『大毘婆沙論』などの三世実有の論証の際に引用されることはなかったが、Sabbathavādin は「すべて真実・正義なる法を説くもの」という認識があったに違いない。南伝大藏經における Sabbathavādin の用法はすべて長阿含とおなじであるから、当然、このことを熟知していたはずであるし、とくに *Anguttara-nikāya* には歳をとっているから上座とするのではなく若くても正義を説くもの (attha-vādin) であれば上座とすべきであると規定している。¹⁷⁾ この Sabbathavādin はまた、attha を言葉の意味と理解すれば一切語言部という訳にもなる。しかしながら、有部では alambana, viśaya, artha は認識の対象を表すときの語として使用されているから、「すべての対象を説くものたち」すなわち、attha は artha (対象) であり、『大毘婆沙論』で明確となる「無対象の認識なし」という教義を示していたと理解する方が妥当である。

f 一切有論 (Sabbathivāda)

また一方、Buddhagosa は『論事註』で Sabbathivāda という語をあげる。すなわち『論事』の「一切有論」(sabbam aṭṭhi-vādakathā) を取り上げ、「過去・未来・現在の：乃至この色蘊」という経文から、すべての過去などに分類される諸法は、蘊の自性を捨てないために一切は有ると名づける執見がある。たとえば、今の説一切有部 (Sabbathivāda) であるという。aṭṭhi はサスクリット語の aṣṭi となるから、『俱舍論』などに出てくる Sarvaśivādin の語と一致する。しかしながら、この『論事註』は六世紀のものであるから、すでに説一切有部の名称が確定していたわけである。

それでは一切が有るとするのは、具体的になにを指しているのであろうか。『俱舍論』では、「過去・未来・現在のすべてが有ると主張するので、かれらが説一切有部 (Sarvaśivāda) である」¹⁸⁾とし、この説一切有論に四大論師をあげている。すなわち世親の理解ではこれら四大論師の主張から説一切有部と呼ばれていることになる。

『識身足論』は三世実有を直接説いていないが、過去・未来がないならば、現在一刹那に二心俱起することはないから、現在の貪瞋痴も観ずることはできないとして、すでに三世の実有の必要性を述べているので、『発智論』の作者迦旃延子以前に説一切有部の基本教理はでき上がっていたことが分かる。

II Sabbathivāda

前述したように説一切有部の名称をもつ銘文は、Mathura や西北インド、中インドにもあるし、時代的には BC I 世紀ごろにはすでに Sarvaśivādin となっていることになる。櫻部建博士によると三世実有説は最初期の有部のアビダルマ論書である『集異門論』や『法蘊論』にみられる「非摂滅」という概念の前提となっていたことであり、この説を採用すると、このころには説一切有部という名称が自他共に認めるところとなっていたことになる。また

『論事』が第三結集によって分別説の正義を論じたものであるとすれば、アシヨーカ王時代に一切が有ると主張したものが存在したことになる。これはBC268年以降のこととなるが、それでは時代が早すぎるから、その後には六足論ができ上がり、すべて正義によって説明し、『発智論』のころに三世実有論が明確となるということになる。

Dīpaṃsa, Mahāvaṃsa が伝える *Sabbathavādin* は、「一切が有るといふ教理が整理される以前の特色を示しているに違いない。有部の漢字音写は「薩婆多部」と記されている。「多」は古代漢音においても“*tar, ta, tuo, tue, (duo)*”であつて、*ṣ* 音にはならない。すでに述べたように、正統上座部を継承しているといふ意味でもともとは *athavādin* 「すべて義によって説くもの」と自称していたのが、次第に「一切の認識は必ず対象を持つとして言語によって表現する部派」といふ意味を持つようになったと思われる。ところが過去・未来を認識する場合、当然認識の対象は存在せねばならず、間もなく *Sarvārthahatinvādin* → *Sarvārthivādin, Sabbathivādin* と呼ばれるようになり、*サンスクリット* 語化されたときに、*Sarvātivādin* となつたのではないかと思われる。またこの部派は南伝によれば、化地部からの分立であり、「すべて義によって説くもの」であり、經典も不了義によらず、了義によって分別したもののたちであるから、化地部自身が好む分別説部とも呼ばれたに違いない。*Dhāvya* はいかなる僅少のものも、已生、現生、未生すべては因を伴うと説くから説因部というとしてべて説一切有部の特色を述べているので、あるいはこのように呼ばれたとしてもおかしくはない。とくに説一切有部系統の分別論者は毘婆沙師 (*Vaiśaṣṭika*) と呼ばれるが、迦多衍尼子の『発智論』以降であろう。

III 大天 Mahādeva

ところで『異部宗輪論』は部派の発生の原因として五事をあげる。分裂の年代について、漢訳三本のうち玄奘訳『異部宗輪論』は「百余年」²³、真諦訳『部執異論』は「滿一百年」、失訳『十八部論』は「百一十六年」とあつて、一

致していないが、いずれにしても佛滅後百年頃に五事を提唱したことによって根本分裂があったことになる。そして玄奘訳はこの提唱者の名前を大天であるという。

『大毘婆沙論』はこの大天について、母と通じ五無間業を犯し、阿羅漢を否定する五事を唱えて教団を分裂させ、阿羅漢たちをカシユミールにおいやった極悪人の比丘であるとして異常な悪意をもって大天の物語を扱っているが、『八键度論』（三八三年訳）、『発智論』（六六〇年訳）にはないし、この物語を扱う五種納息相当部分が十四卷『鞞婆沙論』（三八三年訳）、六十卷『毘婆沙論』（四三六年訳）には欠けているから、『大毘婆沙論』（六五六一―六五九年訳）成立の頃に付加されたものであろう。

しかし一度伝説が取り入れられると容易には消えない。真諦の『部執異論疏』²⁴と吉蔵の『三論玄義』²⁵は、その点についてかなり修正したあとで、『大毘婆沙論』の記事を再現している。すなわち『部執異論疏』や『檢幽集』²⁶は、佛滅後一―一六年にマトウラーの商人の息子でカウシカ家の Mandava が諸の大乗経を取って三蔵のなかに入れて解釈し経を改竄してしまったので結集を行なったといつて、『大毘婆沙論』がまったく記載しなかつた大乗經典活動を取り上げ、三蔵の新しい編纂である第三結集を持ち出している。

七世紀に、玄奘は『大唐西域記』マガダ国の説明の際に大天を取り上げているが、闍達多智であると好意的にとらえていて五事や三無間業については触れていない。²⁷

玄奘は『大毘婆沙論』の説に同意し、迫害された阿羅漢たちがカシユミールに留まり、パータリプトラへ戻ることを拒否したと確認している。これらの状況のなかで第三結集が開催されたかどうか疑問が残る。真諦によると、この結集は阿羅漢たちが戻ったのちに、パータリプトラで起こったという。しかしながら玄奘がパータリプトラの Kukkuṭārāma を訪れたときの叙述に、アショーカ王が佛教へ改宗したのち、彼の僧院で二つの教団（上座と大衆）を構成している一千人のサンガを召集している。ここに上座部と大衆部とに対する言及があるが、結集を開催し三蔵

の新たな暗唱を始めたということは全くいわれていない。²⁸ 玄奘は異端者としての Mahadeva を非難してはいるが、一般にいわれている五事についてはなんの説明もない。

玄奘の弟子である窺基（六三一—六八二）は『瑜伽論纂略』²⁹のなかで Mahadeva を中傷の犠牲者として復権させようとしている。すなわち「大天の評判は高く、かれの徳は偉大であり、若いけれど（阿羅漢）果を達成した。かれは王や貴族たちに尊敬され、比丘たちに崇拜されていた。そのため彼に三無間業や五事を付加したということが負わされた」。大天に好意的なのはこのテキストだけではない。すでに一説部（Ekottara）の初期の注釈であり、大衆部と大乘の教理が混在している『分別功德論』³⁰（CE.25-28）の間に漢訳された）に、大天に聖王が四つの梵堂（brahma-vihara）を寄贈し、かれを大士、すなわち偉大なる菩薩という資格を与えている。³¹

『大毘婆沙論』や『異部宗輪論』などの有部系の論書は大天の五事が、根本分裂の原因であると記していることはすでに述べたが、それ以前の分別説部の *Kahāzūthū*（論事）では、五事が異部の邪説として示され、Buddhagosa の註（*Attakathā*）では、五事が東山住部（*Pubbasela*）と西山住部（*Aparasela*）の説に帰せられていて、大天や僧伽抗争の伝説とは関係なく、五事が論ぜられている。Vasumitra に帰せられる *Samyabhedā* では、大衆・一説・説出世・鶏胤・多聞・雪山の諸派の説として五事を掲げ、Bhavya の *Nikāyabhedā*（第3説、正量部の伝承）によれば、五事を一説部の学説となし、有部ではそれを邪説とする。また、Vinīadeva の *Samyabhedāparacanācetra* では、説出世部の説として五事を記している。従って、雪山部の位置づけは問題が残るとしても、一般に五事は大衆部系では認められ、上座部系では邪説とされていたことが知られる。それゆえ、僧伽分裂はともかくも、僧伽の争論と五事の関係は否定できない。³²

Bhavya の *Nikāyabhedāparacanācetra* に伝える正量部の伝承でも佛滅後一三七年に五事によって分裂し六三年間サンガが論争したが、佛滅後二〇〇年をすぎて上座の犢子部によって、教えが正しく結集されたという。正量部は

犢子部から分派し、犢子部と有部とは近い関係にある。この二つの部派は、大天の五事提唱が分裂の原因とみられている。この伝承は Burston 『佛教史』(一四世紀)や Taranātha 『インド佛教史』(一六世紀)にも多少変形されて伝えられている。

根本分裂については、Yasumitra の『異部宗輪論』の四つの異訳の中で、『十八部論』・『部執異論』・チベット訳では、五事と分派を関連づけるが、大天の名前は見いだせない。ところが、玄奘訳出の『異部宗輪論』(CE 262 年)では、この三者は結合されている。これは玄奘訳の『大毘婆沙論』(六五六一六五九年)と同様である。また、窺基撰の『異部宗輪論述記』(六六二年)では、『大毘婆沙論』の大天の記事を引用し、『大毘婆沙論』に単に「王」とあるのをここでは「無憂王」と改めている。これは窺基が師の玄奘から直接聞き取ったか、あるいは、『異部宗輪論』に従って、『大毘婆沙論』の記事を解釈したためと思われる。すなわち六世紀ごろまで五事と大天とは無関係であったことになる。ではなぜ『大毘婆沙論』あたりから大天を破僧伽の主役として登場させる必要があったのであろうか。

これは大乘佛教運動との関連を考慮に入れなくてはならないであろう。すでに述べたように真諦の伝承は『大毘婆沙論』と同じく大天が三無間業・五事非法を行ったことも認めているが、同時に大乘經典編纂者として位置づけたり、玄奘も『大毘婆沙論』・『異部宗輪論』の説を採用せず、大天を高僧と評価していることから、有部と大衆部・大乘佛教運動者としての大天との対立があったと推測される。真諦の伝承が三無間業と五事非法提唱者としての大天を認めているということは、すでに有部による大天伝承が確立していたことを物語る。

xy(111)に『Mahādeva』について『大毘婆沙論』等の記事の粉飾部分を取り除いて整理してみよう。

- (1) Mahurā 国の商人の息子。
- (2) 姓は Kausika とある。
- (3) Pataliputra に活躍した。

- (4) 才能があり、評判がよい。
- (5) 大衆部の比丘であると同時に大乘とも関係があり、三蔵のなかに大乘経典を入れた。
- (6) Pataliputraの王からも尊敬された。
- (7) 有部の長老たちをカシユミールに追いやった張本人である。
ということになる。

これらの伝承はみな六世紀以後の資料に見られるという難点があるが、この伝承のほかに塚本博士は、*Dipavamsa* などから Mahinda の師であり、Mahisamandala に布教し、Mahinda とともにセイロンに布教、Kakusandha 佛の弟子、Asoka 王の大臣、Durttagamani 時代の比丘、Sanghaisa 時代の比丘をあげている。^{⑤⑥}これらの資料からいいうことは、カシユミール有部系は大天を悪意的に扱い、大衆部・大乘系はこの伝承に修正を加えているが、それでも有部の伝承に引きずられている。南伝は偉大な師として位置づけていて、大衆部・大乘系はこれに入る。^{⑤⑦}

IV Vajjiputtaka

部派分裂を伝える資料は、佛滅後一〇〇年ごろに十事適法を主張した多数派とこれを非法とする少数派が大衆部・上座部に分裂したとするほかに、五事非法問題、五浄法などの原因説などを挙げる。世友 Vasumitra の『異部宗輪論』*Samayabhedaparacanataka* は佛滅後三〇〇年ごろに上座部から有部が分立したことを述べている。中村元博士の佛滅年代 (BC.383) によつて算定すると有部の成立は BC.180 から BC.80 年のあいだに生じたことになる。

一方、南伝の伝承は佛滅後第二の一〇〇年になってからすなわち佛滅後二〇一年から三〇〇年までに上座部から化地部 (Mahāsāsaka) と犢子部 (Vajjiputtaka) の二部が分裂し、化地部から有部 (Sabbathavāda) と法蔵部 (Dhammagutika) が分裂した^⑧とになっており、佛滅をアシヨーカーカ王即位 (BC.270年頃) より二一八年前としている

から、有部の成立はおよそBC280年からBC180年頃となる。十事非法を原因とする上座部系のうち説一切有部の『大毘婆沙論』や『異部宗輪論』などの伝承と正量部の *Nikāyabhedā* だけは、大天が五事を主張し、これによりサンガは分裂したという。

Bhavya などの資料では根本分裂によって二部派（上座・大衆）に分裂した説もあるが、このほかに根本分裂が三部（上座・大衆・分別説部）であったとする説や、四部（大衆・有部・犢子・雪山、あるいは大衆・有部・上座・正量）であったとする説を伝えている。『翻訳名義大集』も根本四部（有部・正量・大衆・上座）を伝え、義浄の『南海寄帰内法伝』にも根本四部（大衆・上座・根本有部・正量）を挙げている。しかし律の伝承の立場から「五部」（法藏・有部・飲光・化地・犢子、あるいは犢子部の代わりに大衆部を入れる）の説も種々の経論に見え、『大唐西域記』卷三にも「律儀の伝訓」としてこれを伝えている。ヴェーサーリー結集が *Vajjiputtaka* によって提唱された十事により行なわれたということは重要である。この結集のあと、かれら *Vajjiputtaka* たちはどうなったのか。多くの伝承の通りであると、大衆部を形成したことになる。しかもかれら大衆部の主体は *Vajjiputtaka-bhikkhu* たちであるから、根本部派「五部」説は極めて重要な問題を提起していることになる。ところが奇妙なことに、*Vesālī* 結集の原因を *Vajjiputtaka* の比丘たちによる十事として、提唱者の名前をあげるのは、有部の『十誦律』・根本有部の『雑事』・大衆部の『摩訶僧祇律』以外の資料であり、『毘尼母經』は毘利祇子 (*Vipputra*?) としている。すなわち、有部系の論書である『根本有部律』、『十誦律』と大衆部の『摩訶僧祇律』だけは、その他の比丘の名前は克明に記述しているのに分裂の原因となった十事乃至五淨法などの提唱者を *Vesālī* 国の比丘としていて “*Vajjiputtaka*” の名前をあげていない。^④

『摩訶僧祇律』は大衆部のものであるから、これは一応置いて、なぜ有部系の律が提唱者の名前を具体的にあげないのであるか。また『毘尼母經』でいうところの毘利祇子 (*Vipputra*?) と *Vajjiputtaka* との関係はどのように

なっているのであろうか。

パーリ律を初めとしてほとんどの律の伝承は、Vajjiputtakaの bhikkhu たちを放逸で不浄法を行なったものと位置づけ、Thera Gatha 1009偈の註では Vajjiputtaka を破和合僧の代表たる Devadatta の一味と見做している^④。

また「Vesali に住む Vajjiputtaka bhikkhu は、放逸で不浄法を行ずる」^⑤ に関して『根本有部律』は Vajjiputtaka bhikkhu については何も述べず、かわりに佛栗氏 (Vṛj) 国の蘇陣那が出家前の妻と跡継ぎを求めするために不浄を行なったと述べている。

Vaji を Vji とみるのは、雪山部の伝承といわれる『毘尼母經』の七百比丘の結集をあつかった記述に「毘舍離毘利祇子諸比丘等」とある記述などから窺うことができる^⑥。

一方、赤沼智善博士は Vajjiputtiya をとりあげて論じられ、南伝の Vajjiputtaka は、第二結集の Vaji (Skt. Vji) と Vatsa を混同または同視したものであろうとされたが、中阿含の『持齋經』^⑦では十六大国のなかに Vaji, Vatsa の両方をあげており、その主張は成り立たない^⑧。

北伝は有部から犢子部が分裂したことになるが、南伝によれば犢子部 Vajjiputtaka は上座部 Theravada から化地部 Mahisaka とともに分裂し、有部は化地部から分派したことになる。しかし大衆部としての Vajjiputtaka が上座部の一派として伝承されているのは矛盾する^⑨。

南伝の『大般涅槃經』には、Vaji 族が阿羅漢を尊敬する限り、衰亡しないという記述を載せている。これは漢訳の一部を除いて一致するところであるが、佛陀の入滅を扱うのに、最初に Ajatasattu 王と Vaji 族の問題を取り上げるのは異常ではないかという印象を拭いきれない。本来はこの記述はなかったのが、Vajjiputtaka によって教団の規律が乱れ、阿羅漢を軽視する風潮が出てきたため、佛陀の入滅と Ajatasattu 王の物語に掛けて Vajjiputtaka たちを

諫め、教団分裂を避けようとしたのではないだろうか。⁵⁴⁾

このような努力にもかかわらず、佛教サンガは Vajjiputtaka の提唱する十事の問題から意見が分れてきてしまった。Vesālī における結集は十事を非法とすることになるのだが、多数派を形成する Vajjiputtaka たちは、阿羅漢を中心とした長老派とは決別し、大衆部となる。金銭納受を戒律の拡大解釈によって認めようとすることは、受畜金銀等銭を禁ずる条項があるかぎり、大衆部といえども適法とすることはできない。このために『摩訶僧祇律』でもこれを違法とせざるをえなかったことは資料の示す通りである。大衆部系の『舍利弗問經』が述べているように、Vajjiputtaka たちの新解釈を押しやるため、Vāśā たち長老は新しく条項を増補しようとしたのである。そこで『摩訶僧祇律』は都合の悪い十事の直接的表現は避け、第一結集で *[P.1]* がすでに誦した五淨法などと金銭納受とを再確認することとして第二結集を記述し、『舍利弗問經』は旧律の改編を根本分裂の原因としたのである。

南伝のパーリ律では、第三結集で分別説以外の異端者は放逐されたというから、この論争にやぶれた有部がやむなくカシユミールに伝道という形で移動したことになるが、この移動は有部からみれば「阿羅漢たちをガンジス河で沈めようとした」というほど待遇の悪い理不尽なもので、このことが色々な伝承として残っていると思われる。

『異部宗輪論』や『大毘婆沙論』が全くこの十事非法問題に触れないのは異常である。有部の正当性を主張するために大天の五事によって、十事非法問題にすり替えたという塚本説は重要である。『異部宗輪論』や『大毘婆沙論』が十事非法問題とその提唱者をあえて伏せているのは、有部と犢子部とが非常に近い関係にあったことと関連しないだろうか。すなわち十事の提唱者と犢子部とが直接関係ありとすれば、十事の提唱者である Vajjiputtaka は有部成立よりも古いことを証明することになってしまふ恐れがあったのである。⁵⁵⁾ たかだか新旧をあらそうことでもなからうと思われるが、部派分裂を伝える資料はどれも歴史的事実よりも自派の正当性を述べることに情熱を傾けていることからいいうることである。

犢子部の教理は五法藏である。犢子部は過去・現在・未来の三世と無為ならびにブドガラを所知とし実有と主張していたといわれるのであるから、犢子部こそ「説一切有部」と称せられるべきことになる。犢子部と有部が非常に近い関係にあり、南伝に従えば上座部から犢子部と化地部が分裂し、化地部から有部が分出している。一方、*Vasumitra* の *Samyabhedaparacamacakra* は説一切有部より犢子部が分かれたといい、有部の伝承は根本分裂を述べる場合にも意図的に *Vajjiputtaka* の名称を伏しており、自分たちが破サンガの主導者と同じ母体出身であると知られるのを恐れているようにさえ見える。また、両部派が教理的にも非常に接近していたことが窺える。^②

また、大衆部を形成した *Vajjiputtaka* とその後の犢子部 *Vāśīputtīya* とは、全く別であるという可能性も吟味しなければならぬだろう。根本分裂が *Vajjiputtaka-bhikkhu* たちの十事非法問題で起こったことは間違いない。しかし、南伝の伝承のようによかれらが上座部に属していたとするならば、十事非法問題で *Vajjiputtaka-bhikkhu* たちとその同調者と決別した長老たちの中から、その後、なぜ破僧伽を引き起こした *Īśāśīmaśīyī* *Vajjiputtaka* と同じ名称をもつ *Vajjiputtaka* という部派が分出したのであるかという疑問が残る。その理由として、

- (1) 十事非法問題を起こした *Vajjiputtaka-bhikkhu* たちと犢子部の *Vajjiputtaka* とは全く同一部族のものたちであった。
- (2) *Vatsa* と *Vajji* (*Viji*) とは、本来別種族出身者であったものが、同じく *Vajjiputtaka* と表現されるようになった。
- (3) 長老名が *Vajjiputta* であったため、*Vajjiputtaka* と *Vajjiputtīya* (*Vāśīputtīya*) とが混乱して *Vajjiputtaka* となってしまう。

ということが考えられる。(2)と(3)の可能性が論証されないかぎり、(1)の可能性は否定できない。すなわち佛滅後一〇〇年の根本分裂は、上座部である化地部からVajjī族が提唱した十事問題から犢子部が分裂し、かれらが大衆部を形成したと考える方が妥当であろう。

有部は三世と無為とを実有であると主張しており、有部にとつては同じく三世と無為とが実有であると主張している根本分裂の主導者が同じ仲間であるという印象は避けたかったに違いない。そこで、根本分裂の主導者であるVajjī族の比丘(Vajjiputtaka-bhikkhu)と後のVajjiputtakaいわゆる犢子部とを分けることによって、時間的隔たりを設けて犢子部が有部から分出したものととして有部たちが本家であることを表わし、サンスクリット語化のなかで、Vātsīputīyaとして相違を明確にすると同時に根本分裂の主導者を意図的に隠し、根本分裂の傳承をMahādevaの五事論争事件に塗り替えたのではないだろうか。

さきに述べたように、説一切有部の名称が、のちの『部執異論疏』のように、一切すなわち有為たる三世と三無為とが実有であるから、この六種が諸法のすべてであるとしてこれを実有とするから説一切有部というのであれば、犢子部も同じく説一切有部と称されてもよい訳である。ところが、有部の母体に近いと思われる犢子部が説一切有部と呼ばれないのは、Sabbathavādinが、もともと「すべてが有る」と主張していたのではなく「すべて正義によって説くもの」と主張していたとすれば、犢子部も一切有論者とすることもなく、部族乃至は教師の名をもってVajjiputtakaと呼ばれたり、教理上の特色からDuggalavādinと呼ばれていたとしても不思議ではないであろう。

有部系の律の傳承は律という点から変更もできず十事非法を述べるが、提唱者の名前を敢て隠し、『異部宗輪論』や『大毘婆沙論』は根本分裂よりもっと重大な事件であった大天派によるカシユミール追放を五事と結び付けて有部の正当性を説明せざるを得なかったものと思われる。

十事非法問題に代わって出てきた大天の五事論は、まさに阿羅漢を否定するものであり、Mahādevaを

Moggaliputtatissa によつて Mahinda 国へ派遣された伝道者と同じと見ると、Mahādeva は必ずしも上座系の伝道師とみなくとも、当時、南インドで活躍していた高僧と理解してもよく、Kāśmīra に派遣された Majjhantika も分別説部の伝道師と見る必要もなく、伝道師派遣は Moggaliputtatissa 系の正当性をいうために創作されたものといえなくもない。そうすると Mathura と Majjhantika に代表される論争は大衆部・大乘佛教と有部との対立から生じたことを見ることが可能となるであろう。

小 結

講演では、『大智度論』と有部教理との関係ならびに『法華経』と有部教理との関係についても論じたが、紙数の都合上割愛して小結とする。

説一切有部の名称をもつ銘文は、Mathura や西北インド、中インドにもあるし、時代的にはBC1世紀ごろにはすでに Sarvāstivādin となつてゐることになる。櫻部建博士によると三世実有説は初期の有部のアビダルマ論書である『集異門論』や『法蘊論』にみられる「非摂滅」という概念の前提となつてゐることであり、この説を採用すると、このころには説一切有部という名称が自他共に認めるところとなつてゐたことになる。また『論事』が第三結集によつて分別説の正義を論じたものであるとすれば、アシヨーカ王時代に一切が有ると主張したものが存在したことになる。これはBC268年以降のこととなるが、それでは時代が早すぎるから、その後六足論ができ上がり、すべて正義によつて説明し、『発智論』のころに三世実有論が明確となるということになる。

Dīpaṅśa, *Mahāvāṅśa* が伝える Sabbathavadin は、一切が有るといふ教理が整理される以前の特色を示しているに違ひない。有部の古い漢字音写は「薩婆多部」と記されている。「多」は古代漢音においても“tar, ta, tuo, tua, (duo)”であつて、“t”音にはならない。すでに述べたように、正統上座部を継承しているという意味でもともと

athavādin「すべて正義によって説くもの」と自称していたのが、次第に「一切の認識は必ず対象を持つとして言語によって表現する部派」いう意味を持つようになったと思われる。ところが過去・未来を認識する場合、当然認識の対象は存在せねばならず、間もなく Sarvatarhātintvādin → Sarvāthivādin, Sabhāthivādin と呼ばれるようになり、サンスクリット語化されたときに、Sarvāthivādin になってしまったのではないかと思われる。またこの部派は南伝によれば、化地部からの分立であり、「すべて正義によって説くもの」であり、経典も不了義によらず、了義によって分別した^④ものたちであるから、化地部自身が好む分別説部とも呼ばれたに違いない。Dhavya はいかなる僅少のものも、已生、現生、未生すべては因を伴うと説くから説因部という^⑤と述べて説一切有部の特色を述べているので、あるいはこのように呼ばれたとしてもおかしくはない。とくに説一切有部系統の分別論者が毘婆沙師 (Vāḥṣika) と呼ばれるのは、迦多衍尼子の『発智論』以降であろう。

有部の付法藏伝は佛陀—迦葉—阿難—(末田地)—商那和修—優波笈多—提多迦となる。この伝承は根本有部のものであるから、中心がどうしても Mathura となるが、カシユミール伝道を異説師 Majjhāntika の追放と理解すれば、すでにこのころには説一切有部の原初形態はできており、Asoka 王のときの高僧 Uḡapūta は有部の付法藏では迦多衍尼子の前に置かれており、Uḡapūta の師である Saṅkavāsi と同じく Mathura の Urumanda (Muraṇṭa) 山に住して活躍していたので、この名前から上座部系のも^⑥のたちが Urumanda (Muraṇṭa) 部と呼んでいたと思われる。このときにはすでに Majjhāntika はカシユミールで伝道をしており、「一切が仮名で実体がない」という主張に対して説一切有部が生まれたという^⑦ことはありえないであろう。またのちに Mathura 有部が根本有部 (Mūlasarvāthivādin) を名乗るのも、有部のアビダルマ文献はほとんどカシユミールで成立したにしても辺境の地であり、中インドで大衆部に対抗して活躍していた Mathura の有部からみれば、根本の有部は自分たちであるとしたのは当然のことであつたと思われる。

以上の所論から導き出された結果を要約して整理してみると、

- (1) 根本分裂は Vajjiputtaka の比丘たちが提唱した十事によって起こった。サンガの分裂を戒めるために、釈尊の涅槃を語る最後の旅のなかに Vajjiputtaka と Ajatasattu の物語を挿入して分裂を防ごうとした。しかし、そのような努力にも拘わらず Vajjiputtaka の比丘たちは Vasa たち長老派以外の大勢の比丘たちの賛同を得て分裂してしまった。この大衆派を形成した主体は Vajjiputtaka の比丘たちであり、かれらが大衆部と呼ばれた。⁵⁵⁾
- (2) 大衆部はそのうち諸部派に分裂していったが、Vajjiputtaka はもとの兄弟部派ともいうべき有部と教理が近似していった。
- (3) 有部は Upagupta の師である Sanakavasi と同じく Mathura の Urumanda (Muruṇṭa) 山に住して活躍していたので、この山の名前から Urumunda (Muruṇṭaka) 部と呼ばれ、その教理的特色から、説因部 (Hetuvādin) 因論、一切語言部、分別説部とも呼ばれ、部派名が一定していなかった。
- (4) Vajjiputtaka は Sanskrit 語化のなかで、Vatsiputriya と呼ばれるようになった。一方、Sabbartha-vāda も Sarvatarthavāda Sarvatarthin-vāda に由来しつつた名称が Sabbarthi-vāda Sarvasū-vāda に変化してしまっ
た。
- (5) 有部教団は、擡頭してきた大乘佛教によって布施を基盤としていた生活が脅かされるようになった。
- (6) その大乘佛教運動の首謀者は、Mathura 出身の商人 Kausika の息子で、Pataliputra で大衆部のもとで出家して活躍し、才能があり、評判もよかった大天 (Mahadeva) であり、三蔵のなかに大乘經典を混入した。
- (7) 大天は菩薩として崇められ評判がよく、犢子部から発展した正量部でも釈尊の生まれ変わりと認め、Pataliputra の王族からも尊敬を集めていた。
- (8) Pataliputra での大天との論争に破れた有部は移動を余儀なくされて、カシユミールへと移った。

(9) カシュミールでの生活は楽なものではなく、大乘佛教信奉者（法華経信奉者）たちはたった一本の楊枝の布施でも成佛できると豪語し、自らを菩薩と称する増上慢なものたちであった。^⑧

(10) 大乘佛教側から二乗不成佛と非難された有部は声聞や縁覚でも成佛できるといふ転根説をいわざるを得なかった。

(11) それでも勢力挽回できなかったカシュミールの有部たちは有部教学の重要な骨格『発智論』の註釈である『婆沙論』が、五〇〇人の無漏智を得た阿羅漢たちによって作成されたという自負さえも忘れ、旧来の『婆沙論』のなかに大天に対する非常に悪意ある中傷や二乗作佛論を加えて、その名称を『阿毘達磨大毘婆沙論』(Abhidharma-mahāvibhāṣā: アビダルマの偉大なる毘婆沙師の論)という膨大な論書に改編してしまった。

このように『大毘婆沙論』は、それまでのアビダルマ文献とは異なつて、大乘佛教を強く意識している。そのため有部の生活基盤を揺るがしているカシュミール方面の大乘佛教活動が有部アビダルマ教学の変化をもたらし、大乘佛教の首謀者である大天に対しても、煩惱を断じ尽くした無漏の阿羅漢たちとは思えないほど、口汚く罵れることとなつたのであろう。このような危機感には『アビダルマデーパ』まで続き、世親の批判に対して正統有部の反論書として完成した『順正理論』の立場さえも超えなければならず、それまで悪魔の教説^⑨として、無視していた大乘佛教教理を積極的に学んで破析する必要性に迫られていったのである。その詳細については拙著『アビダルマデーパの研究』(平楽寺書店)を参照していただきたい。

(二〇〇八年十二月五日 仏教学会公開講演)

注

① 静谷正雄『小乗佛教史の研究』[1978, p.113]

- ② 静谷正雄 [1978, p. 117]
- ③ 静谷正雄 [1978, p. 120]
- ④ 『文殊問經』(大正蔵14, 501b)
- ⑤ 『雜阿含經』(大正蔵2, 165b-170c)、『阿育王傳』(大正蔵50, 102b-106a)、『阿育王經』(大正蔵50, 135b-141b)、『*Dīyāvādāna*, pp. 382-405
- ⑥ *Dīyāvādāna* (p. 349) では 'Rurumunda, Urumunda' が出ているが、漢訳(大正蔵50, 117b) では「優留曼荼」とあるから Urumunda ヲトク。
- ⑦ 『阿育王傳』(大正蔵50, 102b-117a)
- ⑧ 赤沼智善「分別論者に就いて」(『宗教研究』新25)、『木村泰賢『木村泰賢全集』第四卷 p. 280
- ⑨ 塚本啓祥『増訂 初期佛教教團史の研究』[1980, p. 495]
- ⑩ 『大毘婆沙論』(大正蔵27, 247b)、『六十卷『毘婆沙論』(大正蔵28, 104b)
- ⑪ 『大毘婆沙論』(大正蔵27, 303a)
- ⑫ 『三論玄義』(佛教大系本 p. 394)
- ⑬ 『検幽集』(『三論玄義』佛教大系本 p. 395)
- ⑭ 塚本啓祥 [1980, pp. 488ff.]
- ⑮ 『南伝大蔵経』17, pp. 331f.
- ⑯ *DN. III*, p. 135, 『南伝大蔵経』8, p. 171, 大正蔵1, 75c
- ⑰ *AN. II*, p. 22, 『南伝大蔵経』18, p. 40.)の經典は大衆部系といわれる現在の増一阿含には該当箇所がない。
- ⑱ 『俱舍論』(*AKB*, p. 296)
- ⑲ 『識身足論』(大正蔵26, 531a)
- ⑳ 律蔵は比較的に原語を残しているとおもわれるが、法顯が共訳した『摩訶僧祇律』(CE: 418年漢訳) 私記には有部を薩婆多(Sabbathā)と記し、過去・未來・現在の五蘊が各々自性をもつと主張しているので、説一切有部というところ(『摩訶僧祇律』大正蔵22, 548b)。「僧伽跋摩(Saṅghavarman) 訳出の『薩婆多部毘尼摩得勒伽』(CE: 433年漢訳)も Sabbathā と

しづるから、Sabbathavadaとどう用例はかなり遅くまで残っていたと思われる。

⑲ 『漢蔵四訳対校 異部宗輪論』 p. 57

⑳ (1) 「阿羅漢であつても」他によつて誘惑されること

(2) 知らぬこと

(3) 疑惑を「もひつ」と

(4) 他の「助け」によつて自覚に至ること

(5) 「無漏」道は声とともに「生ずる」と

㉑ チベット語訳も百年余り説である(寺本訳『異部宗輪論』 p. 3)

㉒ 証禪『三論玄義檢幽集』(大正蔵70.455D4)

㉓ 『三論玄義』(大正蔵45.8bc)

㉔ 『三論玄義檢幽集』(大正蔵70.456b)

㉕ Lamotte は佛教徒大衆のなかに Mahadeva がおり、「偉大なる知恵のひと、偉大なる能力者、名色 (nama-rūpa) についてのするどい観察者」であるというが、『大唐西域記』には「有凡夫僧摩訶提婆闍達多智、幽求名實澤思作論、理違聖教」(大正蔵51.886b)とあり、名色についての観察者とはとれない。『高麗大藏經』、京都大学版『大唐西域記』など諸版すべて「名實」とあり、Lamotte の誤読である。(Lamotte: *Buddhist Controversy over the Five Propositions*. HQ, 1956, pp. 148f.)

㉖ 『大唐西域記』(大正蔵51.886b)

㉗ 『瑜伽論纂略』(大正蔵43.1b)

㉘ 『分別功德論』(大正蔵25.32c)

㉙ 原文は「昔大天聖王具四梵堂、展転相紹乃至八万四千王皆有梵堂、唯大天一人是大士、其余皆是小節」とあり、大天聖王という王の名前と読めなくもなご。

㉚ 佐々木閑『インド佛教変移論』[2000, p. 391, note 32] は *Nature: Mahāsaṅghika Origins* とは「五事のそれぞれの調査の結果、大衆部内の二次分裂の争点であったという説を紹介している。また、新旧婆沙の比較検討から、大天問題が六十卷婆沙(婆沙B)から意図的に取り除かれたと仮定し、「婆沙B」「十四卷婆沙(婆沙S)」系統が「婆沙論」の原初形であり、それ

」を作成した編者には、これら二箇所（十門納息の註釈と大天問題）には言及したくないという思いがあったと推定する（佐々木 [2007, p. 344] 『婆沙論』諸本の相互関係『印佛研』56-1）が、その「思い」と根拠は不明。

③③ プトン『佛教史』（E. Obermiller: *History of Buddhism by Bu-ston*, pp. 91f.）

③④ ターラナータ『インド佛教史』（寺本訳 pp. 83f.）

③⑤ 塚本啓祥 [1980, p. 240]

③⑥ 大衆部と犢子部並びに大天が関係あると思われる証拠に、犢子部から発展した正量部の『三彌底部論』には、大天を釈尊の前世の名前として扱っている。「佛言。我前世時作轉輪聖王。名曰善見。亦名大天。以是故今受新陰前我不異。是故人與陰各如是。」（『三彌底部論』大正藏32, 463b）

③⑦ Bhavya 第2表（大衆部伝承）*Vinīṭadēva*（寺本訳『異部宗輪論』p. 369）*Varaṅga-prēcha-sūtra*（寺本前掲書 p. 4）

③⑧ 『翻訳名義大集』（大正藏54, 113a）

③⑨ 『南海寄帰内法傳』（大正藏54, 205a）

④⑩ 『三論玄義』（大正藏45, 10a）*『大集經』（大正藏13, 159a）*、*『出三藏記集』（大正藏55, 19c）*、*『舍利弗問經』（大正藏24, 900c）*、*『大比丘三千威儀經』（大正藏24, 925c-926a）*

④⑪ 上座部系の諸律でも十事に関する記述と *Vesālī* の比丘が金銭を受けた記述とでは断層がある。（平川彰『律蔵の研究』[1960, p. 686]

④⑫ *Paramattha Dipani*, vol. III, p. 104

④⑬ *Suttavibhanga*, p. 23（『南伝大蔵経』1, p. 35）『五分律』は王舎城の *Vajjī* 村の孫陀羅難陀という名前の比丘が外道の儀法や俗人の儀法を行ない殺盗姪などの悪事を行ったと述べる（大正藏22, 4a）。「摩訶僧祇律」は *Vajjiputtaka bhikkhu* のことを述べるも、*Yasa* が出家前の妻と子孫を絶やさぬために不浄を行なったと中傷もする（大正藏22, 229a）。

④⑭ 『四分律』（大正藏22, 570c）『十誦律』（大正藏23, 1c）は *Vesālī* に住む *Vajjiputtaka bhikkhu* が、放逸で不浄法を行なったことを述べている。

④⑮ 『根本有部律』（大正藏23, 628a）は *Vajjiputtaka bhikkhu* にこうして述べず、佛栗氏（*Vijjī*）国の蘇障那が出家前の妻と跡継ぎを求めるために不浄を行なったと述べている。

④4 佛栗氏〔根本有部律〕大正蔵23, 628a, 〔根本有部業事〕大正蔵24, 26b)

④5 赤沼智善『印度佛教固有名詞辞典』p. 728

④6 赤沼智善『印度佛教固有名詞辞典』p. 728

④7 中阿含『持斎經』(大正蔵1, 772b, 912c)

④8 ジャイナ教の *Bhagvati Sūtra* にも両方の国が出てゐる。(Homle: *The Uvasagudasa*, II. Appendix; W. Kiefel: *Die Kosmographie der Inder*, p. 225)

④9 平川彰 [1960, p. 137] は「僧祐『出三蔵記集』(大正蔵55, 20c) は摩訶僧祇律は婆伽富羅衆 *Vajjiputtaka* の籌をとるものが多かったため、大衆部と改名したという。跋耆子も音訳すれば婆伽富羅であるし、犢子部 *Vajjiputtaka* も音訳すれば婆伽富羅となるので、この点が混乱して結合したものと考えられる。ともかくヴェーサーリーの跋耆子等が上座部系統の犢子部となり、さらにこれが大衆部に転換したということは、ありえないことであるから、この点に関する僧祐の以上の記述は誤りである」とする。しかし、僧祐は渡印僧法顯の弟子であり、大衆部と犢子部とを勘違いしたとも思えない。

⑤0 註⑥で述べたように、「法顯訳『大般涅槃經』は、*Aṭasattu* と *Vajji* 族の物語に触れていない。

⑤1 事実 *Buddhagosa* の *Kaḥṭṭarūpakaṇṇāṭṭakathā* の序文では、十事非法提唱者も後に上座部から分立した犢子部とともに *Vajjiputtaka* と記されてゐる区別がない。

⑤2 『大毘婆沙論』(大正蔵27, 8b) は、有部と犢子部の教理が非常に近似していることを告白している。

⑤3 律蔵は比較的に原語を残しているとおもわれるが、法顯が共訳した『摩訶僧祇律』(CE. 478年漢訳) 私記には有部を薩婆多 (*Sabbatha*) と記し、過去・未來・現在の五蘊が各々自性をもつと主張しているので、説一切有部というところある(『摩訶僧祇律』大正蔵32, 548b)。僧伽跋摩 (*Saṅghavarman*) 訳出の『薩婆多部毘尼摩得勒伽』(CE. 433年漢訳) も *Sabbatha* としてゐるから、*Sabbathavāda* とどう用例はかなり遅くまで残っていたと思われる。

⑤4 『漢蔵四訳対校 異部宗輪論』p. 57

⑤5 *Frauwaller* も大衆部と犢子部の類似に関して「犢子部グループに律のないのは、伝説のように、彼らの律蔵は単に大衆部の伝承の律蔵を真似ただけのものと理解すればよい」として、犢子部と大衆部の律蔵の類似に関心をもっていた。

(*Frauwaller* "Earliest Vinaya" pp. 10-11)

- ⑤⑥ 拙稿「アビダルマ仏教における声聞成仏と法華経」（中村瑞隆編『法華経の思想と基盤』1980、平楽寺書店）
- ⑤⑦ ADV. (p. 278/7) は大乘佛教を悪魔の教説 (māra-bhāsīa) と呼んでいる。また『法華経』は声聞たちのことばとして「最初、指導者の声を聴き、わたくしの驚疑は激しかったのです。悪魔が仏陀の姿をして、この世に現れて、わたくしを悩ましていたのではないだろうか」とさえ思いました」(SP. (p. 62) と述べている。